家庭教師ヒットマンREBORN!　とある異端な傍観者

黒鋼　朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　とある異端な傍観者

【Ｎコード】
Ｎ４０３８Ｓ

【作者名】
黒鋼　朝陽

【あらすじ】
とある名門校に通う主人公　虹輝はある日学校の帰り道でトラックに轢かれそうな少女を助けて死んでしまう。
だが虹輝はなぜか再び意識を取り戻し、そして眼の前には見知らぬ男が。
男の名はキョウ。彼は自分が神だと主張する。キョウは
「お前は俺の手違いでお前は死んじまった。
だからお前をＲＥＢＯＲＮ！！の世界へ転生させてやる。」
と言って虹輝をＲＥＢＯＲＮ！！の世界へ飛ばしてしまう。

これは虹輝が傍観者として並中へ転入し、ツナや獄寺、山本などのキャラと
関わって行き原作を傍観していく物語・・・・・だと思う。
＊旧タイトル「―異世界の傍観者はある日突然やってくる―」

第０色　☆設定☆（前書き）

初めまして、初めて小説を書く☆ＨＩＮＡ☆です～
一人称がオレですけど女です～
読んでる方これからヨロシクお願いします～

第０色　☆設定☆

☆まずは主人公の設定☆

名前　織羽（オルハ）　虹輝（ニジキ）

性別　女

年齢　１３歳

一人称　オレ

性格　冷静　負けず嫌い（？）　男っぽい

髪の色・眼の色　眼は焦げ茶　髪の色は黒

髪型　肩くらいの長さ

好きな事・物　もちろん、家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！！とケーキ

嫌いな事・物　少女マンガ　ディ〇ニー系　ボーカ〇イド（人柱ア〇スの曲は除く）

後、ガン〇ムとかポ〇モンとかも嫌い

好きな人間　ＲＥＢＯＲＮ！！の雲雀、凪、獄寺など自分

と気が合いそうな奴

嫌いな人間　ぶりっこしてる奴　自分が世界一かわいいと思っている奴

弱虫な奴　天然な奴　同情する奴　自分を神だと思っている奴

☆次は虹輝の手助け的なことをする神様☆

名前　鏡（キョウ）

性別　男

一人称　オレ

年齢　不明　キョウ）ビッグバンが起きるちょっと前に生まれたんだぜっ☆

髪の色・眼の色　白銀　眼は真っ赤

髪型　ポ〇モンのサ〇シみたいな髪型

性格　一言でいうと変な奴　キョウ）変な奴ってひでぇな、オイ

物分りが悪い　一言で言うと馬鹿　キョウ）☆ＨＩＮＡ☆よりは馬鹿じゃねぇからな～

好きな事・物　ケーキとか寿司とか（冷めたカレーライスと肉のレバー以外）

嫌いな事・物　冷めたカレーライス　肉のレバー

好きな人間　虹輝のような変わってる奴

嫌いな人間　虹輝と同じ

☆次は馬鹿なキョウがＲＥＢＯＲＮ！！の世界へトリップさせた奴☆

名前　佐原（サハラ）　千春（チハル）

性別　女

一人称　私

年齢　１３歳

髪型　基本、ポニーテールで気が向いたりするとツインテールか髪を下す

髪の色・眼の色　黒　眼の色も黒　フラン）心の中もどす黒い～　キョウ）なんでいるんだっ！？

性格　どんな時でも優しい　でもすぐパニックに陥る

好きな事・物　家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！！と黒執事と駄菓子

嫌いな事・物　銀魂とほうれん草のソテーと虫

好きな人間　千春）この世に生まれ落ちた命はみんな大好きです！

嫌いな人間　千春）嫌いな人なんていません！

第０色　☆設定☆（後書き）

設定作るの難しいですね～国語得意なはずなのに～

フラン）馬鹿なあんたには無理じゃないんですか？連載小説。

無理じゃないよフラン！人には無限大の可能性があるんだ！

それ、あんたの中学校の先生が今日言ってた言葉じゃないですかー

ギクッ　俺って言ってたけど自分は女ですよ～　男っぽいけど・・・

フラン）ごまかしましたねー　無視するなんて最悪な人間のやることですー

では本編を楽しみにしててください！Ａｒｒｉｕｅｄｅｒｃｉ！

フラン）ＨＩＮＡ－無視しないでくださいー　ではＡｒｒｉｕｅｄｅｒｃｉ！

第1色　虹輝、REBORN！の世界に転生する！

ここは聖華薔薇学院（せいかばらがくいん）。

東大さえも超える超名門中高一貫校。

オレはその学院の創立者の孫で織羽虹輝（オルハ　ニジキ）。

2年前、爺ちゃんが死んだときに中学部に無理矢理入れられたんだ。

あの時はものすごく爺ちゃんを恨んだぜ・・・・。

そんな聖華薔薇学院も今はもう下校時間。だから、オレも後輩と帰ってる途中。

「先輩。今日の寮の夕飯の係は先輩ですよ？皆が先輩のナポリタン希望です！」

オレは今、寮に入ってる。オレが夕飯の係になると皆がナポリタンを希望する。

そんなにおいしいかな？さすがに作る方も飽きるぜ・・・・。

「キャアァァ！！！あっあれ・・・・！！」

声を上げた学生は顔を青ざめて真っ直ぐ前を指差している。

指差している方向を見ると、小さな女の子が車道に飛び出している。

それだけならばまだよかった。その女の子へトラックが迫っているのだ。

その光景を見た途端、オレは考えるよりも先に体が動いていた。

「先輩っ！！無理ですっ！いくら先輩でもあの女の子を助けるのは・・・・！！」

後輩がそういった気がした。

「無理じゃねぇ！いくら勉強できたって、運動できたってよぉ・・・・。

１人の子供の命見捨てる奴はカス以下だぁぁぁ！！」

その瞬間、虹輝は女の子をしっかり抱きかかえていた。

けれど、目の前にトラックは迫っていて――――――――――――

オレはとっさに女の子をかばっていた。

ドンッッ！！

次の瞬間、オレは２０ｍほどふっとばされていた。

あれ？なんか体が動かねぇや。そりゃそうだよな、ひかれたんだもんな。

オレの体からたくさん赤い液体が出ていく。この赤い液体はなんだ？血かな？

あ～オレ死ぬのかな・・・・・。まだやり残したことあったのによ・・・・。

あぁ・・・眠くなってきた。もういいや・・・寝ちゃおう・・・・・。

そしてオレは眼を閉じた・・・・・・。

「まだ寝るのは早いんじゃねぇか？」

すぐオレは眼を開けて起き上がった。

え？なんで起き上がれんの？と思った人はコントでツッコみ役になれるよ、うん。

良く見れば、血も止まっていて体も傷一つなかった。

「お前・・・・誰？」

「オレは全ての世界を管理してる神の鏡（キョウ）だ！お前は誰だ？」

「オレは織羽虹輝だ。ていうか神って・・・・・・。頭イカレてない？精神科紹介しようか？」

「うわぁ～・・・・。軽く傷ついたよ、オレ・・・・・。」

「大体、ここはどこなんだよ！どこもかしこも真っ白じゃねぇか。」

「ここは狭間の世界だ。死者や神たちがいる世界なんだ。あ、大事なことを
忘れてた！えっと・・・・・お前に話がある。」

「話ってなんだ？」

「実はな、あの事故でお前は死んだんだ。」

「ふぅん・・・。って死んだのかよ！」

「あぁ、オレの手違いで死んじまったんだ。だからな？オレはお前を転生
させようと思うんだ」

「は？」

「どの世界にしようか・・・・。そうだな、あの世界でいいか。」

「ど、どういうことだ？オレは生き返るのか？」

「生き返るんじゃない。転生するんだ。手違いで殺人したってことばれたくねぇから。
転生する世界は「家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！！の世界に決めたからな～。」

・・・・。

パシィン！

「な、何すんだ！？」

パシィン！　パシィン！

そういったとたん2回連続でたたいた。

「2度もぶった！父さんにだって殴られたことないのに！」

「ガン〇ムのア〇ロか！てか絶対嘘だろ！手違いで殺人犯したとか、転生させる

とか言ってるけどただの詐欺師だろ！しかも転生する世界はＲＥＢＯＲＮ！！

の世界だと！？」

「驚くのも無理はないな。とにかく、今から5秒数える。そしたらお前はＲＥＢＯＲＮ！！の

世界のオレが用意したお前の家に着く！はず・・・・。」

「各省ねぇのかよ！」

「1、2、3、4、5。着いたら連絡しろよ～」

「えっ？ちょっ！！」

シュン！

「がんばれよ・・・・。虹輝、お前にアイツらの運命がかかっているんだ。

ツナたちのな・・・・・・・・。」

第１色　虹輝、ＲＥＢＯＲＮ！の世界に転生する！（後書き）

短いですね～

フラン）あんたが連載小説作るのが下手くそなだけでしょ～

ヒドイよ、フラン！

フラン）事実を述べたまでです～

ホントにヒドイ！あ、皆様それではＡｒｒｉｕｅｄｅｒｃｉ！

フラン）Ａｒｒｉｕｅｄｅｒｃｉ！

第2色　虹輝、REBORN！の世界に来る！（前書き）

第2話の更新を少しばかり遅れてしまってすみません！
読んでくれてる方、本当にすみません！

第2色　虹輝、REBORN！の世界に来る！

オレは気が付いたら見慣れない部屋にいた。

部屋の家具のほとんどの色が黒か灰色。

聖華薔薇学院のころはなんかピンクや赤などのオレの大っ嫌いな女の子らしい色ばかりの部屋だった。

だがこの部屋はそんな色は全くない。

あるといえばカーテンが白いということだけか。

ふと部屋の中を見回すと窓際にベッドがあり、その上には旅行カバンが置いてある。

オレは早速その旅行カバンを開けてみた。

その中には、生前オレが祖父に秘密でこっそり買っていた男物の服。

そのほかにもウォークマンや携帯、母親の形見のチェーンまで入っていた。

もっと奥の方を探ると1通の手紙が出てきた。

オレは早速手紙を読んでみた。

『やっほー！この手紙を読んでるってことはそっちに着いたらしいな。

この手紙の入っていた旅行カバンは必要なものが何でもそろってるぜ☆

その証拠にお前の母親の形見の入ってたろ？

並中の制服はクローゼットに入ってるし歯磨きセットは洗面台にあるぜ！

この手紙を読み終わったら携帯にオレの携帯番号入ってるからかけろよ！

そんじゃーなー！』

オレはすぐさま携帯でキョウに電話した。

『ヤッホー！無事そっちに着いたらしいな。始めにこの世界でのお前の立ち位置を

教えてやる。

まず、聖華薔薇学院の創立者の孫ってのは変わってねぇ。

だがオレがいうならばお前は異世界からの傍観者ってとこだな。

ここまでは分かったか？』

「ちょっと待て。」

『（無視）　次はオレが何となくお前の身体能力などに付け加えた能力だ。

・身体能力、精神力、体力ともにＭＡＸ
・超直感と瞬間移動が使える
・戦闘力は白蘭くらい
・ＲＥＢＯＲＮ！！のキャラを引き寄せる能力

こんな具合だ。』

「ちょっと待て。」

『あ、今は第１巻のバレーボール大会の前日らへんだから
獄寺は並中にはいないぜ。

雲雀と山本、笹川も並中にはいるけど今は直接関わってこねぇから。』

「待てって言ってんだろうが！」

『（無視）ウォークマンにはＲＥＢＯＲＮ！！のキャラソンは全て入ってるぜ！

大体説明したからもうそろそろ電話切るから。そんじゃーなー。』

「え？あっ！オイ！」　　ツーツーツー・・・・・

キョウが電話を切った時、オレは（もう少し詳しく説明しろよ）と思った。

とりあえず携帯を机に置き、カバンの中から小さなストラップを１５つ取り出した。

それは原型のボンゴレリングと原型前のボンゴレリングと雪のボンゴレリング。

原型と原型前はガチャポンで、雪のボンゴレリングはゲームを予約したら買ったときについてきた。

この時、オレは知らなかった。この雪のボンゴレリングが原作が大きく変わってしまう鍵

として関わってくることに・・・・・・。

第2色　虹輝、REBORN！の世界に来る！（後書き）

やっと、REBORN！！の世界へつきましたね～

フラン）やっとってまだ2話じゃないですかー

俺にとってはやっとなんだ！

フラン）威張っていえることじゃないですよー

別にいいじゃん、威張ったって。

フラン）（無視）　それではみなさん、さようならー

フラン、無視しないでー　　みなさん、さようならー

第3色　虹輝、並中に転入する！

次の日、オレは5時ごろに起きてすぐ朝食を食べた。
聖華薔薇学院は7時ごろには1時間目が始まっていたからだ。
ちなみに朝食はサンドイッチ4つ。ちょっと多い気がするが気にしない。
そのあと、クローゼットに入ってる男物の制服に着替えた。
何故、男物の制服かというとスース―するから。
昨日のうちに準備を済ましていたのでもう出れるけど
早すぎるのもだめだから1曲聞いてから行こう。
オレはウォークマンを取り出し曲を選択し、イヤホンを耳につけた。
選択した曲はユニのキャラソン「心の星」。
すぐにイヤホンから曲が聞こえてきた。
だがあっという間に曲は終わってしまったからオレは登校することにした。
制カバンを持って出発だぜ！

オレはふと隣の家を見た。表札には「沢田」と書いてある。

・・・・アレ？ツナの名字って確か・・・・・沢田じゃなかった？

俺ん家ってツナん家の隣かよ！？後でキョウをとっちめてやる！！

何となくイラついてきたのでオレは並中まで走ることにした。

まぁ、家自体が並中に近いからすぐ着いたけど。

・・・・でも何で校門が閉まってんの？嫌がらせ？嫌がらせかい？

只今７時１７分１７秒。まだ登校時間じゃないからかな～

でもこの高さなら飛び越えられるよな・・・・・。

オレはそう思って、門に足をかけた。

「何やってるの？君。」

後ろからＲＥＢＯＲＮ！！で聞いたことあるような声がした。

オレはそぉっと振り返った。

後ろには雲雀さんがいた。ヤバい、危機的状況だよ！戦闘力は雲雀さんよりオレの方が強いらしいけども！

「君、並中に不法侵入しようとしたでしょ。咬み殺すよ。」

「・・・えっと、オレは転入生なんですけど、早く来すぎてしまっ

たもんで・・・・・」

「ふぅん・・・。仕方ないね、生徒手帳はちゃんと読みなよ。」

そういって校門の鍵を開けてくれた。

そして雲雀さんは校舎へと歩いて行った。

その様子をオレはぼぉーと見ていた。すると、雲雀さんは振り返った。

「君、応接室に案内するからついてきなよ。」

そういって校舎の中に入って行った。オレも当然ついて行った。

応接室は2階～3階の階段を上がってすぐにある。

2人は応接室に入って行った。

雲雀さんは1人用ソファーに座る。ドラマで生徒会長とかが座ってるアレだ。

オレは雲雀さんからは遠いが正面の複数人用ソファーに座った。

「じゃあ、この書類書きなよ。」

オレは渡してきた書類を黙々と書いていると、

「君、なんか強そうだね。雰囲気がそんな感じだよ。」

といったきた。確かにオレは白蘭くらい強いらしいけどさぁ・・・・・。

咬み殺されるのはごめんだぜ！

「今度、戦っｔ『全力で断らせていただきます。』君に拒否権はないよ。」

ヒドイ！雲雀さん、人権を全面無視すか！？

その時丁度書類が書き終わった。よっしゃー！！

「んじゃあ書類書き終わったんで行きｍ『待ちなよ、この書類も』え？」

雲雀さんが渡してきた書類にはこう書いてあった。

『私は雲雀恭弥率いる風紀委員に入ることに承知する　　名――――――――――――――』

「絶対嫌です！」

チャキッ！

オレがそういうと雲雀さんは武器（トンファー）を構えた。怖ぇ・・・・・。

「・・・・仕方ないです・・・・。入りますよ。」

オレは渋々承知して名前のところにサインした。

「君は１－Ａだから。後、暇つぶしに屋上とか行ってみれば？」

オレは応接室を出た後、雲雀さんの言われたとおりに屋上に行ってみた。

ものすごく風が気持ちよかった。とりあえず寝転がってみた。

オレはそのまま眠ってしまった。

――――――――しばらくして――――――――

起きるとチャイムが鳴り響いていた。

オレは寝てたのか。携帯で時間を確認すると8時３０分。

オレはその瞬間、屋上から出て１－Ａの教室へ向かっていた。

ガラッ！

「遅れてすみません！」

「おっ、丁度いいところに来たな。織羽、自己紹介しろ。」

「オレは聖華薔薇学院から来た、織羽　虹輝です。ヨロシクな。」

聖華薔薇学院と聞いてクラスの皆が騒ぎ始める。

「聖華薔薇学院って東大より頭いいとこじゃん！！すげぇー！」

あ、ツナだ。同じクラスだったのか。山本もさがそっと。　　お、いた。

「織羽の席は・・・・沢田と佐原の間だ。沢田と佐原、手を上げろ。」

ツナとサハラ・・・？とかいうやつが手を挙げた。

オレはその間の席に座った。

「オレは沢田　綱吉っていうんだ。ツナって呼んで」

「私は佐原　千春。どんな呼び方でもＯＫ！」

佐原って奴、原作には出なかったよな・・・・。

もしかして・・・コイツ、トリップしてきやがったのか！？

後でキョウの奴、とっちめてやる！！（二回目）

その後、授業はどんどん進んでいき・・・・・。

いつの間にか下校時間になってた。

誰かに聞いたけど、明日は球技大会。ジャンプ弾がくるぜ！

そんなこと考えながら1人で帰っているとか不良が絡んできた。

不良1「なぁ、俺たちと遊ばねぇ？」

不良2「遊んでくれないと無理矢理でも連れてくぜ？」

うぜぇ・・・・。オレはそんなこと考えるとすぐさま不良たちを倒した。

そしてすぐ家へ向かった。

その様子を見ている者がいるとも知らずに・・・・・。

「織羽　虹輝か・・・面白い奴が転入してきたな。調べてみるか。」

第3色　虹輝、並中に転入する！（後書き）

さて、最後に出てきたのは誰でしょうか！

フラン）ミー知ってますよ。X世の家・・・やっぱいうのやめますー

フランのヒントで分かった人多いと思います。

ではＳｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ！

フラン）Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ！

第４色　バレーボール大会来る！（前書き）

もう標的４なんて早いですね～
何故か俺の小説って一度も評価されたことないんです
感想も書かれたことない・・・・・。
誰か評価と感想ぷりーず！
では標的４を存分にお楽しみください！

第４色　バレーボール大会来る！

次の日、オレは7時に学校にいた。

何故かというと昨日オレは雲雀さんに風紀委員入れられたじゃん！

だから「朝7時に学校に来て仕事しなよ」って言われて渋々来たんだよ！

でも仕事したくないから今屋上にいるんだよ！

雲雀さんに怒られたくないけども仕事するのは嫌だ。

だから他の風紀委員にやらせてる。

あ～暇だからユニのキャラソンでも歌お～っと・・・・。

オレは大きく深呼吸をして歌い始めた。

＆2分後＆

「全然歌ってなかったから音程バラバラだな。」

実際は声がユニにそっくりで音は一つも外していなかったのだが。

「仕方ない、仕事するか。」

オレはそういって屋上から出て行った。

リボーンが見ていたとも知らずに・・・・。

「アイツ、歌が上手いみたいだな。とりあえず他の情報を集めないとな。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜しばらくして〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

珍しくツナが遅刻せず登校してきた。

「沢田〜〜〜」

見知らぬ生徒1がツナに話しかけてる。

「お　おはよっ」

ツナもぎこちなく挨拶してる。　あ、持田先輩倒して2、3日しかたってないんだっけ。

「あのさっおまえに頼みがあるんだ！」

「え？オレに頼み？」

「実は今日の球技大会のバレーなんだけどレギュラーが欠けちゃって

お前に出てほしいんだ！」

「オ・・・オレがぁ？」

「持田センパイを倒した時のおまえ、まじかっこよかったよ！その力を
貸してくれ！」

「いや・・・でもあれは・・・」

「なぁたのむよ、たのむ！どうしても勝ちたいんだ！」

「（困ったなぁ～～ど～～しよー　　バレーなんてやったことないし・・・
　あ、でも死ぬ気弾を撃ってもらえば何とかなるかも・・・）
　じゃ、やってもいいかな・・・」

「マジ！？センパイを倒したヒーローが加入してくれれば怖いものなしだぜ！」

「（ヒーロー・・・。）分かった、まかしとけって！」

そんな会話が聞こえてくる

「（うわ～死ぬ気弾って後悔することがなかったら使えねーのに・・・
　ジャンプ弾とかは使えるけど・・・・・）」

どんだけ死ぬ気弾に頼ってんだ、ダメッナ！

とりあえず、教室行こう・・・。

ガラッ！

教室に入って席に座ると佐原千春が話しかけてきた。

「おはよー、織羽さん。聞いた？ツナ君が球技大『知ってる。頼まれてんの見た。』」

「この前、持田センパイをt『知ってるって。教えなくてもいいよ。』」

何となく佐原（コイツ）とは関わりたくない。オレは超直感みたいなのが使えるみたいだから、多分この勘は当たってるはず！

「ねぇ、織羽さん。人を傷つけるような言い方、やめた方がいいと思う。」

「オレはこういう言い方しかできないから。」

オレが冷たく言い放つと佐原は

「明日はそんな言い方しないように気を付けてね。」

そういって、離れて行った。

球技大会中

今は球技大会中。

もうすぐバレーが始まる頃だと思う

「あ、バレー始まるみたいだな」

ツナが入って来たとたん大歓声が起きた。

「早くリボーンがジャンプ弾撃ってくれねぇかな。」

オレはそういった時、誰かが体育館の入り口に立っていた。

「獄寺か・・・。」

見た先には獄寺がいた。オレは獄寺の方へ歩いて行った。

「何してんの？悪童スモーキン・ボム。」

「お前、誰だ？」

「オレは昨日転入してきた織羽虹輝だ。お前、ツナの力量試しをするつもりなんだろ？」

「なんで知ってる？」

「秘密だ。ん、そろそろジャンプ弾撃つころかな。」

ツナが後ろにこけていた。ズボンには2つの穴。

「大ジャンプするぞ。」

言った瞬間、ツナは大ジャンプをしていた。

「オレ、教室に戻るわ。じゃあな、獄寺隼人。」

「アイツ、何者だ・・・・？」

獄寺が言ったときには虹輝は瞬間移動していていなかった。

第４色　バレーボール大会来る！（後書き）

やっと能力を使いましたね～

フラン）雲雀恭弥と戦うのはいつごろなんですか？

標的５、６くらいかな・・・・。

フラン）もうすぐですねー

雲雀さんと虹輝が一緒に仕事してるとこを書きたいです

フラン）（無視）では標的５見てくださいー　さようならー

フラン無視すんな～！では皆様、さようなら！

第5色　獄寺来る！（前書き）

標的5の最初ですが、皆様とある作者の方に謝罪しなければならないことがあります
ある方から、前話で異世界からの傍観者、来襲！！に題名が似ていることやキャラの名前が同じだということに指摘されました。
題名が似ていることやキャラの名前が同じなのは偶然です。
後から異世界からの傍観者、来襲！！を読ませていただきましたが、その時まで気が付きませんでした。
けれど、偶然でも作者の方に謝罪しなければと思いこの場を作らせていただきました。
異世界からの傍観者、来襲！！の作者の方、偶然でもキャラの名前が同じであったり、題名が似ていたということを謝罪いたします。
題名を変えることはしませんが、キャラの名前は全て変えさせていただきました。
本当にすみませんでした。

それでは改めまして標的5をお楽しみください。

第5色　獄寺来る！

次の日の朝、オレは6時に起きた。

というのも今日、獄寺が来るというビッグイベントがあるせいで興奮して

あんまり眠れなかったからだ。

何だ、それだけかと思っている読者の方々。

オレにとってはそうじゃないんだぁぁぁ！！

オレの好きなキャラランキングの2位を堂々と飾るのは獄寺だぜ！？

興奮するに決まってんだろォ！

え？昨日の球技大会の時は何で興奮しなかったのかって？

興奮を心の中で押し殺してましたよ！

ちなみに好きなキャラランキングの1位は凪ことクローム髑髏だぜ！

オレはすぐに準備を全て済まして家を出た。

走って行って息切れしたくないから瞬間移動（テレポート）で行くか。

シュンッ！

一瞬で並中の校門前へ。今の時間帯は学校には風紀委員だけしか

いないはずだから見られていないはず！

本当は屋上から下を眺めていた雲雀に見られていたりする。

「織羽虹輝・・・・どうやって現れた？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊HR（ホームルーム）中＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今日は転入生が来ている。入ってきなさい」

ガラッ！

教室に獄寺が入って来た。

「イタリアに留学していた転入生の獄寺隼人（ゴクデラハヤト）君だ」

ツナはこの後睨まれて、机を蹴られるんだろ～な～

「（イタリアっていうとリボーンの故郷（ふるさと）と一緒か・・・・・・・）」

見知らぬ生徒２「ちょ・・・かっこよくない～～～？」

見知らぬ生徒３「帰国子女よ！」

「（ふう～～ん。女子ってああいうのがいいんだ～～）はっ！京子ちゃん！」

ツナが笹川を見た時ニコニコ笑っていた。
笑っている理由は多分、仲良くなれたらいいな、と思っているからだと思う。
でもその時、ツナは、
「（うわ――――――――――――　こころなしかニコニコにみえる――――っ
ちっくしょー　感じわりーなー　あの転入生）」
と思っていた。
「（ま、笹川が何でニコニコしているのかの理由を教える気はないけどな。）」
その時、獄寺はツナを睨んだ。ってアレ？オレの方も睨んでないか？
うわーショックだぜ～　泣きたい気分だぜ～（涙）
「な！なんだよ～～～～～～！？」
「獄寺君の席はあそこの・・・獄寺君？」
お、こっちの方に向かってきた。ツナの机を蹴る気か！ついでにオレの机も
蹴られそうな気が・・・・・・。
ガっ！
「でっ！」

おっ机蹴られた！あ、オレの机も蹴られるかも・・・・・。

獄寺がオレの机を蹴ろうとした瞬間、オレは獄寺に話しかけた。

「何でオレの机まで蹴ろうとするんだ？やめてもらえねぇかな？」

オレは微かに殺気を発した。

すると、

「チッ」

獄寺は先生に指示された席に座った。

オレＶＳ（バーサス）獄寺はオレの勝利！やったぜ！

でもこれでリボーンや獄寺に警戒されたらどうしようか・・・・・。

オレは休み時間になるまでずっと悩んでいた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋休み時間＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

休み時間になるとオレは校舎から出て木の陰に座っていた。

何故かというとこの周辺で獄寺とツナが戦うからだ。

おっ来た。もうちょっと奥に隠れよっと。

「目に余るやわさだぜ」

「！　き・・・君は転入生の・・・！そ、それじゃこれで」

「おまえみたいなカスを１０代目にしちまったらボンゴレファミリーも終わりだな」

「え！？なんでファミリーのことを？」

「オレはおまえを認めねぇ。１０代目にふさわしいのはこの俺だ！！」

「な！？」

「なんなんだよ　急に？そ・・・そんなこと言われたって…」

「球技大会から観察していたが貴様のような軟弱な奴をこれ以上見ていても時間のムダだ」

「バレー見てたの！？」

「目障りだ。ここで果てろ。」

「んなぁ！？バ！爆弾！？」

獄寺はタバコの火でダイナマイトの導火線に火をつけた。

「あばよ。」

そういって獄寺はダイナマイトをツナに向かって放り上げた。
「え！？うわ！ひっ　うぎゃああ」
その時、リボーンが撃った弾丸で火は消えた。
「ちっ」
「ちゃおっス」
「リボーン」
「思ったより早かったな　獄寺隼人」
「ええ？知り合いなの？」
「ああ　オレがイタリアから呼んだファミリーの一員だ」
「じゃあ　こいつマフィアなのか！？」
「オレも会うのは初めてだけどな」
「あんたが９代目が最も信頼する殺し屋　リボーンか
沢田を殺ればオレが１０代目内定だというのは本当だろうな」
「ああ　本当だぞ　んじゃ殺し再開な」
「オレを殺るって・・・何言ってんだよ冗談だろ？」
「本気だぞ」

「まさか・・・オレを裏切るのか　リボーン！！今までのは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ　戦えって言ってんだ」

「冗談じゃないよ！マフィアと戦うなんて！！」

ツナはそういって逃げようとしたが獄寺が前に立ち塞がる。

獄寺はたくさんのタバコで大量のダイナマイトに火をつけた。

「獄寺隼人は体のいたるところにダイナマイトを隠し持った人間爆撃機だ
て話だぞ　又の名をスモーキン・ボム隼人」

ツナは逃げ続けついに行き止まりに。

その時、リボーンがツナに死ぬ気弾を撃った。

「死ぬ気で戦え」

「復活（リ・ボーン）！！！死ぬ気で消火活動！！！」

「消す消す消す消す消す消す・・・・・」

「消す」と連発しながらダイナマイトに火が消えてゆく。

「うわ～・・・・。ホント荒々しいな、死ぬ気モード。間近で見ると怖いっての」

獄寺は2倍ボムを投げたがすべて消される。
獄寺は3倍ボムを投げようとすると1つ落とした。それを取ろうとすると
ダイナマイトを全て落とした。
「ジ・エンド・オブ・俺・・・）」
何で「俺」だけ日本語なんだよ・・・・。
けツナは獄寺のまわりの全てのダイナマイトを消した。
「はあ～何とか助かった～～～」
「御見逸れしました　あなたこそ10代目にふさわしい！！！
10代目！！あなたについていきます！！
何なりと申し付けてください！！」
「はぁ！？」
「オレは最初から10代目ボスになろうなんて大それたこと考えていません
ただ10代目がオレと同い年日本人だと知って、どーしても
実力を試してみたかったんです・・・・・・
でもあなたはオレの想像を超えていた！
オレのために身を挺してくれたあなたにオレの命預けます！」
「そんなっ困るって命とか・・・　ふ・・・普通にクラスメイトでいいんじゃないかな？」

「そーはいきません！」

「獄寺が部下になったのはお前の力だぞ　よくやったな　ツナ」

オレはその様子を見ると、すぐ教室に戻って行った。

幸い、リボーンには気付かれなかった。

この後、やってきた3年生は獄寺にシメられましたとさ。

このイベントはそんな感じでは終わらなかった。

だが獄寺はリボーンにこんなことも言っていた。

「リボーンさん、クラス同じの織羽って奴は何者なんですか？
　オレが１０代目に実力を試すことも知っていたし・・・・・。」

「さぁ、分からねぇ。今度、オレがアイツをつけてみるつもりだ・・・。」

そういったリボーンは少し笑っていた。

第5色　獄寺来る！（後書き）

フラン）今日は作者がなんかものすごい落ち込んでるみたい
なんで、後書きはないですー
それではさようならー

第６色　退学クライシス＆雲雀との戦闘！（前書き）

少し更新が遅れてすみません！
親にＰＣ禁止令出されたんですよ～
中間テストがあるからって・・・・・。
あ、俺、一応中１ですからね！？
それでは標的６をお楽しみくだ～い！

第６色　退学クライシス＆雲雀との戦闘！

今、屋上で雲雀サンと向き合っているんだけどさ・・・。

無茶苦茶怖いんだよね・・・雲雀サンが。

痛いほどの殺気をこっちに向けてくるし、何よりトンファーが怖いって！

ツナだったら腰抜かしてるだろな～・・・

この状況になるまでを説明するには理科の授業まで遡って説明しなきゃなんない・・・。

めんどいけど、まぁいいや。回想スタートだ！

？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

「川田」　「はい」

今日は退学クライシスの日だ。

そして今は理科のテスト返しの時間だ。単元は「花の仕組み」だったっけ？

誰でも７０点以上は取れるだろっていうくらい簡単だったぜ？

ダメツナは２６点取ったらしいけどな。

「佐原」　「はい」

佐原がテストを受け取ろうとすると、根津は邪魔をした。

ウゼーなー、根津の奴。

「あくまで仮定の話だが・・・・・クラスで惜しくも９０点台を取った生徒がいたと
しよう。その生徒は落ちこぼれどもとつるんでいる。それはその生徒が
慈悲の心を持っているからだ！！」

佐原は慈悲の心なんか持ってねーよ、絶対。　馬鹿じゃねーの？コ

イツ。

佐原は根津を無視して席に戻った。

「織羽」

気安くオレの名を呼ぶな、学歴詐称男。

「織羽、早く来なさい」

チッ、仕方ねェな。

オレがテストを奪い取ろうとすると、根津が邪魔してきやがる。

ふざけんな、５流大卒の学歴詐称男。

「あくまで仮定の話だが・・・・クラスで唯一１００点を取った生徒がいたとしよう。
その生徒はあまりほかの生徒とは関わりを持とうとはしない。
何故なら、優秀な生徒は落ちこぼれ共とはつるまないからだ！！」

は？何言ってんの？このオッサン。

先生をオッサンと呼んではいけないと思った読者の方々、そこはツッコまないであげてほしい。

「オイ、オッサン」

「オッサンだと・・・・！？貴様、誰に向かって口をきいていると思っているんだ！」

根津、その問いに特別に答えてやる。

5流大卒の学歴詐称男に向かって口をきいてるんだよ？

「オレは優秀とか落ちこぼれとかで差別したりしたことはねぇ。
オレがあまり人と関わらないのは・・・・・」

『他人と関わると面倒臭いことが起きやすいからだぁぁぁ！！！！』

これは前世の記憶から学んだことだぜ。

前世のオレの後輩は問題ばかり起こしていた。

だからこの教訓が生まれたんだよ！

（『えぇ～！？』）

後日談だが・・・・この時１－Ａの教室にいた生徒は全員内心そう思っていたらしい。

その後、ツナが呼ばれた。

そしてまた根津は仮定の話をする。

「あくまで仮定の話だが・・・・クラスで唯一２０点台を取って平均点を
いちじるしく下げた生徒がいたとしよう。
エリートコースを歩んできた私が推測するに、そういうやつは学歴社会において
足を引っ張るお荷物にしかならない。
そんなクズに生きている意味あるのかねぇ？」

そしてテストをペラリとめくる。

あ、やっぱり２６点だったな。

ガラッ！

獄寺が来たみたいだな～。

「コラ！遅刻だぞ！！今頃登校してくるとはどういうつもりだ！！」

「ああ！？」

獄寺が根津を睨みつける。きっと獄寺、内申点悪いだろ～な～（笑）

「やっぱこえーよ、アイツ・・・。」

「先輩をしめ返したって話だぜ」

きっとツナは今、他人のフリしようと必死なんだろな～

他人の思考を読んでやるなよ、と思った読者の方々は正しいと思うぜ☆

「おはよ―――ございます、１０代目！！」

「ぷっｗｗ」

マンガでもこのシーンは笑えたけど、リアルで見ると態度の豹変がすごすぎて
スゲェ笑えるｗｗ

「どーなってんだ！？」

「いつの間に友達に？」

「いや・・・きっとツナが獄寺の舎弟になったんだよ」

見知らぬ生徒Ｃ、逆だ！獄寺がツナの舎弟になったんだぜ！

「い・・・いや、違うんだよ・・・」

何を否定してるんだ、ツナ。獄寺がお前の舎弟になったのは事実だぞ！？

「あくまで仮定の話だが、平気で遅刻する生徒がいるとしよう。

そいつは間違いなく、落ちこぼれのクズとつるんでいる。
何故なら類は友を呼ぶからな。」

てか何回目だよ、仮定の話すんの。しすぎだろ。

「オッサン、良く覚えとけ」

「先生、社会で習いませんでしたか？」

あ、佐原千春、邪魔するな。これからが面白いって時に。

「１０代目、沢田さんへの侮辱は許さねぇ！！！」

「先生がやってることって人権侵害ですよ！」

そういった瞬間、獄寺は根津の首を絞め、佐原千春はどっから取り出したのか、
鉄の棒で根津の腹を殴っていた。

佐原千春は怒るとカッとなりやすい性格（タイプ）か・・・・。

そういえば、どこからコンを出したんだよ・・・。

コンとはなんだと思った方に説明します。
コンとは鋼を棒型に固めた武器です。多分。
それでは気を取り直して本編へどうぞ。

「あくまで仮定の話だと言ったはず・・・だ・・・・・・っ」

根津は気絶しかけた。

その後、授業が自習になり、オレとツナと獄寺と佐原千春は校長室に呼び出された。

「貴様ら、退学だ――――――――っ」

「落ち着きたまえ、根津君」

「これが落ち着いていられるか！私に暴言を吐き、終いには暴力をふるったのですぞ！！」

「連帯責任で沢田、織羽、佐原も退学にすべきだ！！」

え？なんでオレまで？オレ、暴力振るってないのに・・・・。

「しかしですな、いきなり退学に決定するのは早計すぎるかと・・・・」

「では猶予を与えればよいので【ガラッ！】！？」

校長室の戸を開けたのは、雲雀サンだった。

「ひ、雲雀君！？何をしに来たのですか！？」

「ん？織羽虹輝、何でここにいるんだい？」

雲雀サン、校長をガン無視すんのは可哀想だからやめてあげようよ。

「織羽は私に暴言を吐いたのです！なので退学なのですよ！！」

「退学・・・？」

雲雀サンは眉を顰(ひそ)め、校長に耳打ちをした。

「・・・・!!!お、織羽!君の退学は取り消しだ!だから教室に戻りなさい!」

「え〜!?何で織羽さんだけ!?」

ツナがそう叫んだが気にしない。

「あ、あの!」

そう言ったのは佐原千春だった。

「何?僕は草食動物と話してる暇はないんだ。」

「何で、織羽さんだけ助けたんですか?」

「草食動物を助ける気はないからさ」

オレは雲雀サンと一緒に校長室から出た。

教室に戻ろうとすると、雲雀サンが手首を掴んできた。

「な、何ですか？雲雀サン★」

「ちょっとこっちきなよ。」

連れられてきたのは、屋上。

「君の実力を見たことがないからね。僕と戦いなよ。」

？？？？？？？？？？？？？？？？？回想終了？？？？？？？？？？？？？？？？？

という訳だ！

あ～、怖すぎる。穴が有ったら入りたい気分だ。

「仕掛けてこないの？じゃあこっちから行くよ！」

雲雀サンがトンファーを振り下ろしてきた。

その攻撃をオレは軽々とよける。

そしてオレの拳が雲雀サンの腕や頬を掠る。

どうやってこの戦闘を終わらせようか・・・・・。

手刀じゃ、首折れちまうし・・・・。

一応言うけど、本気の白蘭くらい強いってのは素手でだからな！？

あ～どうしようか・・・・。

＊1時間後＊

1時間経っても戦闘は続いていた。

オレはかすり傷が少しある程度だが、雲雀サンはかなり傷を負っている。

すると突然、手に黒い光が現れた。

黒い光は何かの形を作っていく。

これは・・・・・鎌！？

オレが動揺したスキをついて雲雀サンはトンファーを振り上げていた。が、鎌で受け止めた。

鎌が雲雀サンの制服を切り裂き、トンファーの仕掛けががオレの左腕を掠る。

そして次の瞬間、オレは雲雀サンの首筋に、鎌の刃を当てていた。

「・・・・・降参だよ、織羽虹輝。」

オレは鎌を下した。黒い鎌は光となって消えて行った。

雲雀サンは、屋上の入り口へ向かおうとした。が、足取りがふら付いている。

「オイ、手当てするからこっちにこい！」

あ、敬語でしゃべんの忘れてた。

「手当てなんかいらない・・・・・・っ！」

そういったとたん、雲雀サンは倒れかけ、オレはそれを支えた。

よく見ると、雲雀サンの身体は傷だらけ。そりゃ、そうだろな。

オレの攻撃、ほとんど当たってたもんな。

オレは雲雀サンを壁にもたれさせ、小さな救急セットを取り出す。

どこから取り出したんだ？と思った読者の方々はとても正しいと思う。

その中から消毒液とガーゼと絆創膏を取り出した。

「少し沁みるけど、我慢しろよ？」

傷口に消毒液を付けた。

「・・・っ！」

結構痛かったみたいだけど、そこは無視だ。

傷口に絆創膏やガーゼを当て、手当ては完了した。

「雲雀サ『恭弥って呼んでいい。』！『その代わり、また戦いなよ？』」

雲雀サン、否、恭弥は負けたのが悔しくてしょうがないらしい。

「あぁ、また今度な！」

オレは満面の笑みでそう答えた。

そしてオレは恭弥に肩を貸して屋上の階段を下りて行った。

恭弥の顔が赤く染まっていたのは夕日のせいなのか、それとも違うのか。

それはきっと誰にも分からないだろう。

その二人の姿を見て嫉妬の炎をにじませていた人物がいたのは誰も知るよしもない。

第6色　退学クライシス&雲雀との戦闘！（後書き）

後書きでコーナーを作ることにしました！
その題名はハルのハルハルインタビューならぬ・・・・・
「ヒナのヒナヒナインタビュー！」
っていうのはさすがにダメなので・・・・・。
題名を皆さんに考えてもらおうと思います！
お願いします！

それではさようなら！

第７色　虹輝、キョウに情報を吐かせる！！

今日、オレが起きたらキョウがベッドの前で土下座してた。

「キョウ君？朝っぱらからそんな気持ち悪い物見せられても、私困るよ？」

オレが悪魔がやりそうな笑顔で言うと、

「一人称が‘私’になってますぅぅぅぅ！！！」

って言った。

五月蠅いなー、ご近所迷惑だぞコノヤロー。

「何で佐原千春とあの黒い鎌のこと、教えなかったのかなぁ？」

「スミマセン、スミマセン、スミマセン、スミマセン、スミマセン、スミマセン！！！！」

「黒い鎌の事を３０秒以内で説明しろ。でないとお前は肉の塊と化す。」

「雲雀と虹輝様が戦ってる時に読んでた「冒険王ビィト」って言う漫画の武器の才牙って
いう武器を興味本位で作って後付けで能力に付け加えたんですぅぅぅ！！！」

「２９秒、３１秒」

「ホッ」

「いい加減、敬語やめろ。何かキモい。」

「グサァッ！！」

「佐原千春の事も吐いてもらうぜ？」

「え？」

「早く吐け。じゃないと本気(マジ)で殺す」

虹輝は眼に殺気を滲ませて、黒い鎌をキョウの首筋に突き付けた。

「死にたくねーからやめて！？」

「んじゃ、さっさと吐け」

「はいぃ・・・・・あれはお前が死ぬ3日前だった――――――――――――」

仕事がひと段落したから人間界を暇つぶしに見てたんだ。

ま、この時の書類の書き間違いで虹輝は死んだんけどよ。

オレは普通に歩いている女を見てた。

その瞬間、何か強い力を感じてオレは人間界へ落っこちってった。

それから少しの間気絶してたみたいだが、誰かの声で起きた。
『やっと起きましたね、１０分も気絶してたんですよ？』
その女はオレが強い力を感じた人間だった。
『お前がオレを呼び寄せたのか？』
今更だがこの質問は唐突すぎたと思う。
『え？じゃあ貴方は神様なんですね！』
『は？・・・・・・まぁ、そうだけど。』
『じゃあ私の願いをかなえてください！』
『は？』
『私に特殊能力をつけて「家庭教師（かてきょー）ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！！」の世界へ
連れてってくれるっていう願いを！』
『――――――ッ！？』
『私、みんなと一緒に戦いたいんです！お願いします！』
オレはこの時、何となく直感した。
コイツは原作を変えれるかもしれない、と。

『分かった。いいぜ。』

「という訳なんだ！」

「勝手に安請け合いすんなよ。あんたそれでも神様か？」

「うぐっ！」

「ま、でもここまで原作が変わってないってことはあの覚悟は薄っぺらいもん
だったんだろうけどな」

「いや、これから佐原千春のせいで大幅に原作が変わっちまう可能性もあるぞ。
気をつけろよ、虹輝。」

「あぁ、分かってるっての。」

「ところでもうすぐで学校遅刻だぜ？」

時計を見ると８時２４分。

「別にいい、休むから。でもこうなったのはキョウ、お前のせいだよな？」

「ヒィッ！」

「しっかり罰は受けてもらうぜ？」

その後、虹輝の家から長時間男の悲鳴が聞こえ続けたという・・・・・・。

それが神様だということは虹輝以外誰も知らない・・・・。

「神より強い人間ってのもどーなんだよ・・・・」

第7色　虹輝、キョウに情報を吐かせる！！（後書き）

この話は山本自殺未遂事件の3日前の話です。

山本の話と退学クライシス。

どれだけの日数が開いたかは分かりませんがとりあえず書いてみました！

次回予告、まだ1度も書いたことはありませんが・・・・。

次話から書いて行こうと思います！

それではさようなら！

第8色　山本の自殺騒動来る！（前書き）

本来なら昨日、更新するはずだったんですができなくてすみませんでした・・・。

昨日、野外活動から帰って来たばっかりで母親に「野活から帰って来たばっかりだから駄目」って言われました。

チクショー、昨日誕生日なんだからいいじゃねーかぁ・・・（泣）

というわけで更新できなくてすみませんでした・・・・。

そして標的8をお楽しみください！

ちなみに雲雀サンと虹輝はいつの間にやら、かなり仲良くなってます！

第8色　山本の自殺騒動来る！

今、オレは恭弥に風紀委員の仕事手伝わされてまーす・・・・。

５時３０分頃、学校の敷地内に入ったら強制連行。

なんで手伝わなきゃなんないんだよ！って反論したら、

「何言ってんの、君風紀委員でしょ？これくらいの仕事すぐやっちゃいなよ。」

って言われた・・・・。

確かに風紀委員に入ったけれども！

あれはお前が怖いから入っただけじゃボケェェェェェ！！！！！

「恭弥ァ、まだ終わんねーのかよ？」

「・・・・後、１２０枚書類終わらせたら行っていいよ。」

ふざけんじゃねェェェェェェェェ！！！！！

そんなにできるかってんだ！オレはお前の雑用じゃねーんだぞ！？

早く恭弥が変態南国果実ナッポーに倒されればいいのに・・・・・

（笑）

・・・・・・でも口に出したら咬み殺されるから言えない（涙）

「何か変な事思ってたでしょ。」

「お、思ってねェよ！な、何いきなり変な事言ってんだ、お前。」

恭弥は読心術でも使えんのか！？怖えーな・・・・。

恭弥がなんかゴソゴソと何か取り出した。

箱か？なんかそっから、甘い香りがする・・・・。

「１２０枚やったらこれあげるけど？」

箱を開けてみる。

箱を開けたらコレはビックリ！中身はケーキ！！↑虹輝のキャラ違う（笑）

「ケーキ！？どうやってオレの好きな物を知ったんだ！？」

「どうでもいいけど、コレ欲しくないの？」

「欲しい！」

「じゃあコレ早く終わらせてね？（黒笑）」

☆1時間後だぜ☆

「やっと終わった・・・・・。」

「じゃあ、教室に行っていいよ。」

「ケーキは？」

「ハァ・・・・。ハイ、早く持って行きなよ。」

オレは恭弥からケーキの入った箱を渡され、応接室を出た。

「あ、やべ！今日、山本の自殺騒動じゃん！」

オレは急いで屋上へ続く階段を駆け上がった。

屋上の入口の扉を開けると、やっぱり山本がいた。

「山本」

呼んでみた。すると山本が振り返る。

「お前・・・・織羽か？」

「そーだけど？何？何か用か？」」

淡々と返事を返すオレ。山本に近づいて屋上の段差的な所に腰を下ろす。

「何やってんだ？」

「お前の無様な死に際、見てやろーと思ってな。」

「！？」

山本が驚く。そりゃ自分しか知らないことを他人に言われたんだから驚くだろーな。

「あのな、たかが骨折しただけで自殺？馬鹿馬鹿しい。
ふざけんなよ・・・・。テメェみてーな奴が命を粗末にしていいと思ってんのか？
残された奴等がどれだけ悲しむか、分かってやがんのか！？」

「！」

「分かってやってんだったら、別にオレはどうでもいいと思うぜ？
次会うときは、オレが死んじまった時だ。じゃーなー、山本。
地獄の底で会おうぜー。」

虹輝は冷たく言い放ち、その場を瞬間移動（テレポート）で去った。

・・・内心、「山本に説教しちまったぁー！！！山本の前で瞬間移動（テレポート）使っちまったぁー！！」と叫びまくっていたのを顔には出さずに。

瞬間移動（テレポート）した先は、家。

だってケーキ冷やさないといけないじゃん！

虹輝はケーキを箱ごと冷蔵庫に入れ、教室の前に瞬間移動（テレポート）した。

そして教室に入ると、ざわついていた。

すると佐原千春が近づいてきて、

「織羽さん！山本君が屋上で自殺しようとしてるの！屋上に行って一緒に山本君の
自殺を止め『残念ながら、オレは行かねーよ。』　分かった、じゃあ後でね！」

皆が出て行った後、虹輝は自分の他に一人残っているのに気が付いた。

「瑞月（ミヅキ）、お前も残ったのか。」

『うん』『僕は』『面倒事には』『あんまり関わりたくないからね』

この少女は矢魔破瑞月（ヤマハミヅキ）。性別は女。

退学クライシスの後頃から話すようになった奴だ。

今ではすっかり仲良しだけどよ・・・・・。

『虹輝は』『何で』『残ったんだい？』

めだ〇ボックスで人吉君が忌み嫌っているっぽい、あの人，と話し方がそっくりなんだ！

めだ〇の世界の、あの人，の代わりなのか！？と思った。

コイツ何者？・・・・・、神（キョウ）に問い詰めるしかねェな（黒笑）

『虹輝』『さっきからぶつぶつと』『変なこと言ってるよ？』『電波でも』『受信した？』

「・・・！　何かつぶやいてたか？」

『うん』『週刊少年ジャンプにのってる「めだ〇ボックス」の』『単語が聞こえてきたよ？』

忘れてた・・・・。こいつも，あの人，と同じようにジャンプ愛読者だった！

「何でもねーよ。それより明日、家来ねーか？Ｗｉｉやろーぜ！」

『いいね』『明日、学校から帰ってすぐ行くよ』

★その頃の屋上★

「ツナ、お前すげーな！お前の言うとおりだ、死ぬ気でやってみなくっちゃな！」

「！」

「佐原もサンキュー！オレ、どーかしちまってたな。馬鹿がふさぎ込むとロクな事
　ねーってな！」

「わ、私は何にもしてないよ！」

「後、織羽にもお礼言っとかなくちゃな。」

「え？」

「『残された奴等がどれだけ悲しむか分かってやがんのか！？』って説教してくれたんだ。
確かに親父に怒られるわ。この親不孝者が！ってな。
他にもツナとか佐原とかみんな悲しむもんな！」

「織羽さんがそんな事を・・・・？」

この話を聞いて、リボーンは虹輝にさらに興味を持ったという。

「ぶえっくしゅん！風邪でも引いたか？」

『大丈夫？』『マスクでもしたら？』『風邪が他の人に』『うつらないようにさ』

「あぁ、そうする。」

そんな事、虹輝は知る由もないのだが。

ちなみにケーキは２つあったのだがキョウが食べてしまった。

その後、虹輝の家から男の悲鳴が聞こえたのは言うまでもない。

第8色　山本の自殺騒動来る！（後書き）

球磨川さんそっくりの話し方の人が出てきました！

矢魔破　瑞月です！

名字と名前も微妙に似せてみました・・・。

この頃、めだかボックスの第1巻～最新巻を友達に借りて読んでみたら結構面白い・・・・。

単行本集めようかと思ってます！

では次回予告を虹輝、お願いするぜ！

虹「なんでオレが・・・・。まあいいか。」

虹「次回はあの牛ガキが登場！爆発被害でオレは沢田家に苦情を言いに行くぜ」

虹「・・・ったく、何で家の中で手榴弾投げんだよ！？」

ありがとー虹輝。今度、ラ・ナミモリーヌのチョコケーキおごるぜー。

虹「2個おごれよ？（黒笑）」

うぐっ！では俺は近畿でしかやってない「ちちんぷいぷい」って番組観るのでさようなら

です！　逃亡）

虹「逃げんじゃねー！」

番外編　1年A組リボ山先生！　上（前書き）

次話が思いつかなかったので番外編を作りました。
ヘタだと思われますがご容赦ください。

番外編　1年A組リボ山先生！　上

「1年A組リボ山先生始まるぜ～！」

「黙れ、キョウ」

虹輝はキョウの腹を殴った。

「グボォッ！！！」

きょうは９９９９のだめーじをうけた。

きょうはしんだ。

「死んだことにすんじゃねーよ！」

「チッ」

「舌打ちすんじゃねー！」

「分からない読者の方々に説明しよう！

1年A組リボーン先生！は当然の１０代目ファミリーやこれから出るヴァリアーや

ミルフィオーレファミリー、アルコバレーノ、シモンファミリーの面々を

先生、または生徒として出してしまおう、という作者の勝手でウザったい企画

だぜ♪」

「何いきなり説明始めてんだ！しかも微妙にキャラが崩壊してるって！」

「黙れ」

ドカッ

「うぐっ・・・」

「それでは読者のみなさん、行ってらっしゃい！」

「きゃーらーがーほーかいしてるー！」

「死ね」

ドゴドゴドゴドゴドゴッ！

「ウギャァァァァ～～～！！！！」

～～

ここは並盛中学校。

いつも風紀委員によって平和が保たれている。

けれども今日は何かが違った。

そう、何かが・・・・・。

虹輝は教室の戸を開けた。

「はよっす」

「あ、おはよう。織羽さん」

「お、おはよう・・・・。」

虹輝が教室に入って最初にあいさつしたのは炎真とツナ。

ツナは虹輝に近づこうとすると足をぶつけ、その上滑ってひっくり返った。

「イテテテ・・・・」

「ツナ君、大丈夫？」

炎真はツナに駆け寄り、虹輝もそれに続く。

「大丈夫かよ、ツナ。いつもよりダメっぷりがヒドイな」

「結構傷つく――！」

ツナが叫んでいると、獄寺が入って来た。

ツナがこけていることに気が付き、すぐに駆け寄る。

「だ、大丈夫っすか？１０代目」

「うん、大丈夫だよ」

獄寺は手を差し伸べ、ツナはそれを掴んで立ち上がる。

「ありがとう、獄寺君」

「これくらい、どうってことないっす！」

ツナと獄寺はそのまま席へ行き、話し始めた。

炎真もいつの間にか席に座っていて、読書をしていた。

「よし、今日はサボるか」

虹輝はいきなりとんでもないことを決心して、教室を出ようとした。

すると。

「何でチャイム鳴りそうなのに教室から出ようとしてんだ」

リボーンに見つかった。

「何でリボーンがここにいるんだ」

「リボーンじゃねェ、リボ山だ」

リボーン、否、リボ山は定規で虹輝の頭を軽くたたこうとしたがう

まくかわした。

「チッ」

「生徒をたたこうとするなよ」

虹輝は渋々席へ行く。

リボ山は教卓へ行き、上に乗った。

「今日は担任の先生が休みだから代わりにオレがホームルームをすることになった」

リボ山はチョークで名前を書いていく。

この時、リボーンを知ってる奴は全然気づいていなかった。

リボーンがリボ山だということに。

モチロン虹輝とツナ以外だが（笑）

「リボ山だ。よろしくな」

「何でリボーンがいるの――――――！？」

ツナはツッコんだがそのせいでチョークを投げられた。

「イテッ」

「ホームルーム中に叫ぶんじゃねェ」

この時、虹輝は思った。やっぱりリボーンは生徒に結構ヒドイ、と。

「出席をとるぞー。織羽」

「へイ」

「古里」

「はい・・・。」

「獄寺」

「ケッ」

「ちゃんと返事しやがれ」

今度は獄寺にチョークを投げた。しかも剛速球。

「ウグッ」

まともに食らった獄寺は欠席扱いになった。

「沢田」

「・・・はい」

「山本」

「おう」

獄寺とは違い、スルーされた。

「これで全員だな」

「あのよ、人数が無茶苦茶少なくねーか？」

今気が付いたが、周りを何度見回してもオレとリボーンを合わせて６人しかいない。

「６人で何をするんだ？」

「テメェ等は補習だ」

「えぇ～～～～！！」

ツナが叫び声をあげる。

「テメェ等は、獄寺と織羽を除いてだが、テストの点が５０点以下だったから補習だ」

『オレ等は？』

オレと獄寺の声が重なる。

「織羽はサボりすぎ、獄寺はダイナマイトを仕入れに行きすぎで休みすぎだ。

というわけでテメェ等は補習だ」

「チッ」

オレは舌打ちをしたが誰にも聞こえなかったらしい。

「最初は英語だ」

リボーンはそう言って教室から出て行った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

最初の授業は英語だった。

先生はなんと・・・・・！

「?ぉぉぉぉい！ちゃんと聞きやがれぇぇぇ！」

・・・・スクアーロだった。

「何でスクアーロなのぉぉぉぉ！！！」

ツナは今日、叫びっぱなしだ。

「沢田ぁ、鉛筆を英語でなんていうんだ？答えろ！」

「ぺ、ペンシル？」

「違う！」

「ペンソー？」

「ちがぁう！正解は・・・ペンソ？おぉぉぉいだ！」

「ぜってぇちげぇだろ！」

「絶対違う――――！」

少しずれてたけど、オレとツナのツッコみがスクアーロに襲い掛かる（？）

「合ってるはずだ――――！」

スクアーロも対抗する（？）

こんな感じのやり取りがしばらく続いた。

下に続く！

第9色　アホ牛ランボ来る！（前書き）

大分間が開いてしまいました。すみませんでした。
番外編の続きはできるだけ早くに更新します。
本当に申し訳ございません。

第9色　アホ牛ランボ来る！

今日は日曜日。

普通なら風紀委員は日曜日でも登校しなければならないのだが・・・・

今日は珍しく風紀委員は登校しなくても良くなっていた。

それは雲雀が虹輝に頼み事をしたのが事の発端だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

応接室に人の影が２つあった。

片方は虹輝で、もう片方は雲雀である。

「ねぇ、織羽虹輝」

「・・・・・・・」

「聞いてないフリをするなら咬み殺すよ」

そう言って雲雀は椅子から立ち上がり、武器（トンファー）を構えた。

いつもの虹輝ならここですぐさま土下座をしていたのだが・・・・・・。

今回は違う。

虹輝もすくっと立ち上がり手に光を集め、黒い鎌を出した。

虹輝が何故構えたかというと、イラついていたのだ。

この前、鏡がケーキを食べてしまったことによって。（標的8参照）

どちらか動いた方が殺（ヤ）られる。

そんな空気の中、誰かが応接室に入ってきた。

「い、委員長！ある不良が風紀委員を何人も倒し続（つづ）・・・って
２人共何をやってるんですか！」

草壁哲也、風紀委員会の副委員長だった。

「何かあったの？」

「あ、はい！２人組の不良が風紀委員を５人程倒しているんです！」

「織羽虹輝、この勝負はお預けだね」

「そうみたいだな」

雲雀は応接室の戸に手をかけたが、虹輝の方へ振り返った。

「日曜日、僕は並盛から出かけていないから君パトロールしといてよね」

「分かったよ。あ、オレがパトロールやるから他の風紀委員は休みにしといてくれよ」

「何で？」

「それ位いいだろ？いつも頑張ってくれてんだし」

「・・・・・・良いよ。だけどパトロールしっかりやってよね？」

「う・・・・分かったよ・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

というわけで今日は風紀委員は休みなのだ。

本当はパトロールに何か行く気はない。

けれど雲雀に咬み殺されたくないから、行くしかないのだ。

虹輝はTシャツの上から、雲雀から受け取っていた学ランを羽織る。

そして玄関へ向かおうとした、が・・・・・・・・

ドカァン！！

隣の家から聞こえた爆発音で足を止めた。

「ツナの奴、何やってんだ？」

虹輝はパトロールに行く前にツナん家行くか、と呟き瞬間移動（テレポート）でツナの家の前へ移動した。

そしてチャイムを鳴らそうとした瞬間、後ろから泣き声が聞こえた。

虹輝は後ろへ振り返るとランボがいた。

ちなみに虹輝の嫌いなキャラ？1はランボである。

けれど今回ばかりは泣いていたので、声をかけることにした。

「どうしたんだ？オマエ」

するとランボは虹輝にすりついてきた。当然、鼻水と涙がズボンに染み込んでくる。

「とりあえず、ツナに預けるか・・・」

虹輝はランボに抱き着かれたまま、インターホンを押した。

ピンポーン

すぐにドアが開き、ツナが出てくる。

「どなたですか・・・って織羽さん！？」

「爆発音がウルサくて苦情言いに来た。後、この牛ガキはツナん家の奴か？」

「え？えぇ？」

ツナが回答に困っていると今度はツナの足に抱き着いた。

「うわっ！やめろよ！」

「とりあえず、爆発物には気をつけろ。風紀委員に連絡しろよ？」

「はい！ってコイツオレの弟じゃないんですけど！？」

「そんなのどうでもいいっての。じゃあ、オレはパトロールに行くから」

「あ、また明日！」

オレはツナん家の前から瞬間移動（テレポート）で立ち去った。

「どうやって消えたんだろ・・・・？」

ツナにそんな疑問を残して・・・・。

ちなみに虹輝はちゃんとパトロールをしてストレス発散に不良をボコし続けていたり。

第9色　アホ牛ランボ来る！（後書き）

後書きのコーナー名が決まりました。

提案者はミチルさんでコーナー名は・・・・・・

『ヒナと鏡のＧＩＳコーナー』です！

訳すると『ヒナと鏡のギリギリまでインタビューしちゃいますコーナー』

なんだそうです！

というわけで今回からやって行こうかと思います！

今回のゲストはリボーンの主人公、沢田綱吉！

ツ「何でオレー！？」

細かい事は気にしてたら心が小さい人だと思われますよ？

ツ「何気にヒドイし！」

鏡「いちいちツッコんでたら禿るぞ？」

ではインタビュー開始。虹輝をどう思いますか？

ツ「え？うーん・・・・初めて会ったときは不思議な人だな、って思ったかな。
秘密が多いから今でも思うけど・・・・やっぱいい人だと思う」

鏡「どこが良い人なんだよ！アイツ、ストレスが溜まってるからって何度もオレに☆Ｏ．ＨＡ．ＮＡ．ＳＨＩ☆を・・・・・・＞ガクガク」

ツ「この人の身に何が合った訳ー！？」

佐原千春の事をどう思いますか？

ツ「優しいし、誰にでも気を配れる人だよ。
頭良いし、今度勉強教えてもらおうかなぁ・・・・」

鏡「オマエ、頭悪いもんな」

ツ「何でこの人知ってんのー！？」

これでインタビューは終わりです！

ギリギリまで問い詰めたりはしてませんでしたが楽しめたでしょうか。

ギリギリまで問い詰めたら、これからの展開が分かってしまったりしそうなので。

それでは最後は虹輝に締めてもらいましょう！

虹「なんでオレなんだよ！」

そんなことを言わずにやってください！

虹「チッ　仕方ねェな。次話はまた番外編になると思う。
　面白くないかもしれないが作者のために見てやっといてくれ」

それでは・・・・・

虹・作者「Ｖｅｄｉａｍｏ　ｄｉ　ｎｕｏｖｏ！」

お知らせ

この小説の作者、☆ＨＩＮＡ☆です。

今回はタイトルにもあるようにお知らせです。

タイトルを変えます。

実は活動報告で昨日までに皆さんにタイトルの投票をしてもらってたんです。

実際には3名の方に意見を頂いたのですが、どの方も違う意見で決まりませんでした。

なので、その3人の方の誰かの意見を尊重させてもらいます。

選ばれなかった方は本当に、本当にすみません。恨まないでください。

これは俺が空っぽの頭で一生懸命に考えた結果なんです。

では発表します。

タイトル名は・・・・・

「―異世界の傍観者はある日突然やってくる―」から「とある異端（イレギュラー）な傍観者」

に変わります！

竜華零様、ご意見をありがとうございました。

ではさようなら。

番外編　1年A組リボ山先生！　下（前書き）

やっと思いついた番外編の続きです。
前は思いついたんですけどね

番外編　1年A組リボ山先生！　下

「やっと終わった・・・・・」

虹輝は1時間目の出来事を思い出しながらそういった。

本当にあの空間は辛かった。

何しろスクアーロの「?おぉぉい!」という叫び声とツナの叫び散らす声。

それにあの後、獄寺のダイナマイトの爆発音が投下されたからたまったモノではないだろう。

「次は家庭科か・・・・。そういえばオレ、家庭科はギリギリ落第になってなかった気が・・・」

虹輝の隣のツナが溜息を漏らす。

確かにツナは家庭科だけは落第になっていなかった。

逆に言ってしまうと家庭科以外落第しているということになるが。
（笑）
だがあのリボーンの事だから無理にでも補習を受けさせるのだろう。
それが分かっているのでツナは肩を落としているのだ。
「ダイジョーブだ。自称右腕君に手伝ってもらえば良い」
「自称じゃねェ！」
虹輝はツナを励ましたつもりだが、その言葉の途中にあった「自称右腕」という言葉に反応して獄寺が虹輝に突っかかった。
「だってホントじゃねェか」
「例え１０代目がオレを「右腕」と認めてくれなくても、オレは一生１０代目の右腕だ！」
「まぁまぁ、落ち着けって」

山本が２人の仲裁に入る。

そのおかげで獄寺は多少不機嫌だが黙って、虹輝はツナに料理のコツを教え始めた。

「そういえば僕、「１年Ａ組リボ山先生！　上」でも全然出番ない・・・・」

炎真君が何か電波を受信したようだけど気にしないでください。
ｂｙ作者

炎真が電波を受信している間に家庭科室に着いた様で全員家庭科室に入って行った。

そこで待っていた先生は・・・・・・・

「家庭科は僕が担当するよー？ヨロシクねー、綱吉クンに虹輝チャン♪」

・・・・・・・白蘭だった。

「何で白蘭ー！？」

「一応、原作の継承式編では山本君の怪我を直してるんだけどなー」

白蘭も電波を受信したようですが気にしないでください。　ｂｙ作者

「とりあえず補習の課題は卵焼と炒卵だから、それ作って見た目と味が自分で良いと思ったら帰っていいよー」

「ノリ軽っ！」

そして全員作り始めた。

全員物凄く集中して作っていた。

ツナは虹輝に教わったコツのおかげで・・・・・

「できた！」

何と1番に作り上げていた。

しかも味と見た目も上々。

なので早速合格し、獄寺と山本を待っていた。

最終的にツナ→虹輝→獄寺→山本→炎真の順で作り終わった。

炎真はあまりにも変な卵焼きになっていたので虹輝が手伝った。

でもそれでも全然できなかったので白蘭に手伝ってもらっていた。

獄寺は白蘭が手伝うのが不思議でしょうがなかったらしく、ずっと白蘭の様子を見ていた。

「んじゃー、家庭科の補習終わり♪各自帰っていーよー」

「１０代目帰りましょう！」

「帰ろうぜ、ツナ、織羽」

虹輝とツナは教室に出ようとする獄寺と山本について行こうとしたが・・・・。

「まだ、終わってねーぞ」

ツナだけリボーンのキックを後頭部に食らった。

「何すんだよ、リボーンッ！」

「補習はまだ終わってねーぞ」

ツナは忘れていた。

自分は家庭科以外全て落第していることに。

「オメー、家庭科以外全て落第してるだろ。だから後で家でもミッチリ教えてやる」

「そんなの嫌だー！！」

リボーンから逃げるツナにそれを追いかけるリボーン。そしてその2人を常人ではないスピードで追いかけている山本と獄寺。

その光景を見ていた虹輝は一見、平静を保っている振りをしながら内心笑い続けていた。

・・・・実はあの4人の光景よりもリボーンに後頭部をキックされた時のツナの顔がツボにハマっていたり。

そして放課後。

虹輝だけは学校に残っていた。

否、残らされていた。

雲雀に書類仕事をサボったのと家庭科室が勝手に使われているという濡れ衣？で、反省文&書類をやらされていたのである。

最終的に夜になっても終わらず、眠ってしまい雲雀に次の日咬み殺されたとか。

番外編　1年A組リボ山先生！　下（後書き）

白蘭の一人称って僕であってたっけ・・・・？
誰か教えてください！

第１０色　入ファミリー試験　初めての傍観タイム！（前書き）

１人称と３人称が混ざってる時が多々あります。
気にせず読める方はこのまま下へスクロールしてください。

第１０色　入ファミリー試験　初めての傍観タイム！

最近ますます暖かく・・・・っつうか暑くなってきた。

本格的に‘夏’になって来たって感じだ。

あぁ、アイスかカキ氷が食いてェー・・・・・。

ま、そんな事言ってる間にもオレはこの屋上でクレープ（商品名「ｃｏｌｄ☆ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙクレープ）」を口に頬張ってるんだけどな。

何でクレープを屋上で食ってるかっていうと、恭弥に書類仕事とクレープの交換？をしたからだ。

ここ最近全く風紀委員の仕事してなかったからな・・・・・嫌だって言ったんだけどクレープに釣られちゃってさ。。

でもよ、まさか１２９９枚も書類をやらされるとは思わないじゃん！

今更後悔してるよ・・・・・ハハハ・・・。

閑話休題（それはさておき）。

オレが屋上に来てる理由はもう１つある。

それは・・・・・・

「ちなみに不合格は「死」を意味するからな」

よっしゃ！セリフ聞けたぜ！

あ、言って無かったな。今日は山本の入ファミリー試験の日なんだよ！

「試験は簡単だ。とにかく攻撃をかわせ」

リボーンはそういって銃をどこからか取り出す。

リボーン・・・・一般人にはその条件は酷過ぎるぞ・・・・。

オレはカバンからノートを取り出してシャーペンで開いて１ページ目に日付と「入ファミリー試験」と書く。

オレは今日から日記をつけることにした。

イベントがあった日も無かった日も。

そうすればいつ何が起こったかも分かるからな。

オレはノートとシャーペンを持って屋上のフェンスに上った。

ん？どうやって片手が塞がったままで上ったかって？

キョウからもらった能力に「身体能力ＭＡＸ」ってあっただろ？

それのおかげで何とか上れたよ。

そしてオレは入ファミリー試験の様子を見始めた。

「ついでに佐原、オマエも試験に受けろ」

「え？そ、そんなことしたら千春ちゃんの命が危ないよ！！」

ツナは何時の間にやら佐原千春の名を「千春ちゃん」と呼んでいた。

気持ち悪っ！

「死んだらそれまでのヤツだったってことだ」

「そういう問題じゃないでしょ！？千春ちゃんは一般人なんだよ！？」

大丈夫だろ。佐原千春だし。（意味不明

「それでも人間、命の危機になったら死ぬ気で逃げれるだろ。
んじゃ、始めっぞ」

そう言ってリボーンはナイフを構える。

原作を知っている千春はそれを見て、走り出した。

「まずはナイフ」

そして構えられていたナイフは一直線に山本達の方へ飛んでいく！

「うおっ！」

「きゃあっ！」

山本とツナはギリギリで避けることができていたが、原作を知っている千春は何故かナイフを掠ってしまう。

「ま！待てよリボーン！！本当に山本と千春ちゃんを殺す気かよ！！」

「そうだよ、殺す気なの！！」

千春とツナはリボーンに反論するが・・・・・・

「まあ、待てツナ、佐原」

山本にそれを遮られる。

『え？』

ツナと千春から呆けた声出る。

「オレ等も餓鬼ん時、木刀で遊んだりしたろ？いーじゃねーか、付き合おうぜ」

「まだ子供の遊びだと思ってるんだ・・・・」

千春は呆れて溜息をついた。

「ボスとしてツナも見本を見せてやれ」

「はぁ！？」

「そいつぁー良い。どっちが試験に受かるか競争だな」

「山本君、ツナ君が試験に合格(ごーかく)してもツナ君がボスだから意味無いんじゃない？」

正論だけどもオマエに言われたかねーよ！

山本は千春の声が聞こえなかったらしく、

「さあ、逃げろ！」

と言って走り出した。

ツナと千春も後を追って走り出す。

3人が走り出すとリボーンは再びナイフを構え、投げ始める。

山本は余裕で、ツナと千春はギリギリで避けていた。

「ホントに投げまくってんなー・・・・・ナイフ」

その頃、オレはカキ氷をシャクシャクと食っていた。

ギィィィ・・・・・・

屋上の古びた扉が開く音がなる。

オレは扉の方へ振り向いた。

フェンスに上ってるけど、この程度の動きなら大丈夫だ。

『あれ？』『虹輝、こんなところにいたんだね』

屋上の扉を開けたのは瑞貴だった。

「・・・・ったく驚かすなよ。オマエの気配は掴み難いんだからよ・・・」

『気配を』『察知するって』『結構すごいと思うんだけど』

「そうか？・・・まぁ、気にすんな。それより瑞貴、あの有様をどう思う？」

その頃、校庭ではナイフやボウガンの矢が突き刺さっていた。

『風紀委員長がいたら』『抹殺されてると』『思うよ』

「ふぅーん、そうか・・・」

『僕は』『そろそろ帰るよ』『もうすぐ大売出しの』『バーゲンがスーパーで』『始まるからね』

ちなみに瑞貴は1人暮らしの自称「貧乏学生」だ。

「お、じゃーなー」

瑞貴は扉の奥に入って行った。

階段を下りる音が響く。

「さてと、今の状況はどうなってるかな・・・？」

虹輝がそう呟き、校庭の方へ向きを戻した直後、

「ガハハハハ、リボーン見――――っけ！！」

と聞くだけでムカつける声が聞こえた。

その声の主は当然・・・・

「オレっちはボヴィーノファミリーのランボだよ！！
5歳なのに中学校に来ちゃったランボだよ！！」

ランボだった。

「ウザいの出た――――――――――っ！！」

ツナのツッコミがよく聞こえる。

「しかし、よくあんなにデカイ声が出せるよなぁ・・・・・。
屋上にまで聞こえてくるなんてよ」

オレがそういっている間、リボーンと獄寺がボソボソ何か話している。

小さい声だからか全く聞き取れなかった。が、

「続行」

という声だけははっきり聞くことができた。

ランボはそのまま無視(スルー)されて、「が・ま・ん」と言って泣きそうな顔をしていた。

だがすぐに鞄を探り始めて、何かを取り出した。

「そ――――――っおだ!!イタリアのボスが頑張ってるランボに武器を送ってくれたんだもんね」

その何かとは――――――――――――――

「パンパカパ～～ン♪ミサイルランチャ～～～～～ッ！！！」

ミサイルランチャーだった。

「あんな小っせーカバンからどうやってミサイルランチャーを・・・・？」

オレは疑問に思っていた。

どうやってあんな小っせーカバンからどうやってあんなデケェ物取り出してんだ？

４次元ポ〇ットかよ！

ランボはそのままミサイルランチャーを撃ち始める。

校庭が爆発しドカーンと爆風と爆音がこっちにまで及んでくる。

リボーンはボーガンを地に落とし、サブマシンガンをどこからか取り出し撃ち出した。

「まずは見習いの殺し屋レベルだ」

その後、ランボが１０年バズーカを撃ち、１０年後ランボと入れ替わる。

１０年後ランボはオレに気が付いたらしく、

「初めまして。若かりし虹輝さん」

と挨拶してきた。

１０年後、オレとランボは面識あるのか？

そう思った直後、リボーンはロケット弾、ランボはミサイルランチャー、獄寺はダイナマイトで、
ツナ達に攻撃し、そのまま爆発した。

爆風のせいでオレも校庭に吹き飛ばされる。

オレは浮遊感に晒され、気分が悪くなる。

けれど今はそれどころじゃない。

オレは黒い光を手に集めて鎌を作り出した。

そして鎌を地に突き刺す様な体制になった。

そしてオレは地面の叩きつけられた。

鎌のおかげか少しダメージが軽減されたけど、それでもダメージが重くのしかかる。

山本と獄寺の楽しそうな？会話が聞こえる。

「あれ？あれって・・・・織羽さん！？何で倒れてるの！？」

「さっきの爆発で屋上から落ちたのかもな」

「え！？じゃあ、無茶苦茶ヤバいじゃん！！」

「だが、身体の傷がほとんど無い・・・・」

「え！？・・・・と。とにかく織羽さんを保健室へ運ばないと！」

ツナとリボーンが近づいてくる。

ヤバい・・・・鎌を戻さねェと・・・・・。

「・・・？この黒い鎌は何だ？」

「さ、さあ？とにかく織羽さんを運ぼう！獄寺君、山本！こっちに来て！」

獄寺と山本と・・・・チッ・・・佐原千春も来やがった・・・・・。

『どうしたんだ／ですか、ツナ／１０代目！！』

「織羽さんがさっきの爆発で屋上から落ちたみたいで・・・・！運ぶのを手伝って！」

「分かりました！ほら、野球馬鹿！行くぞ」

「あぁ」

「私は何をすれば・・・・」

「オメェにできることは無い。邪魔にならねェ様にさっさと帰るのが無難だな」

「リボーン！」

「ホントのことだろうが」

「・・・・うん。私帰るね」

そう言って千春はカバンを持って走って校門を出て行った。

「よし、持ち上げるぞ！」

山本の掛け声で2人はオレの身体を持ち上げた。

それと同時に黒い鎌は光となって手に戻って行く。

「鎌・・消・・た・・・・・・？」

「どう・・・仕・・みな・・・だ？こ・・鎌は」

リボーンとツナが口々に何かを言ってるけど聞こえにくくなってきた・・・・・。

山本と獄寺がオレを保健室へ運び始めたところで、オレの意識は闇に沈んだ。

第１０色　入ファミリー試験　初めての傍観タイム！（後書き）

ちなみに最後のツナとリボーンの最後のセリフは

「鎌が消えた・・・・？」

「どういう仕組みなんだ？この鎌は」

となります。

では第２回！「ヒナと鏡のＧＩＳコーナー」の始まり、始まり。

今回のゲストは天然野球小僧、山本だー！

山「よろしくなー！」

では早速質問です！

虹輝の事をどう思いますか？

山「不思議なヤツだな」

鏡「一言でまとめた！？」

では佐原千春の事をどう思いますか？

山「いいヤツだ。何かと気を配ってくれるしよ」

鏡「虹輝の質問の答えよりは長いな・・・・」

山「織羽は謎が多すぎるんだよ。自殺しかけた時以来話したことねーし」

では前回よりは短いですが今回の「ヒナと鏡のＧＩＳコーナー」は終わりです。

次回は悪童スモーキン・ボムこと「獄寺隼人」！

楽しみにしておいてください。

ではさようなら！

第11色　虹輝、リボーンに会う！

Ｓｉｄｅ　キョウ

「たーいへーんですー！キョー様ぁー！」

今年、大天使（ミカエル）になったばかりの部下が走ってオレがいつも仕事をしている部屋に入ってくる。

「何だ？今まで転生させた人間達の待遇に不備でもあったのか？」

今まで世界に消されかけた者、不幸な出来事が有り得ない位起こった者、オレの書類ミスで死んでしまった者を転生させてきた。

コイツが走ってきた時はそれの待遇の不備があったってことだが……。

「ちーがーいーまーすっ！この前に転生させた虹輝（ガキ）の事で来たんですっ！」

オ、オイ！虹輝って書いて何て読んだ！？

虹輝に聞かれたら、オマエ死ぬぞ！？

「アイツ、ここに来た時の雰囲気から只者じゃないと思ってたんですけどねー。ココだけの話、じーつーは……」

部下がオレの耳元で何か囁く。

「な、何だって――――――――――――――――――！！！！！」

それは今までで一番衝撃を受ける事実だった。

Ｓｉｄｅ　虹輝

「んん……ふ、あぁぁぁ……」

アレ？何でオレ、こんな所にいるんだ？

見た感じ、保健室っぽいけど……。

「あ、織羽さん、眼が覚めたんだ。大丈夫？」

ガララ、と音がして入って来たのはツナとリボーン。

オレの目が覚めたことにすぐ気付いて、駆け寄ってきた。

いや、駆け寄ったっていうのはおかしいか……。

「だいじょーぶ。オレ、ケッコー身体強いから」

「理由になって無いよ！」

「それよりも織羽虹輝。オマエに聞きたいことがあるんだ」

リボーンがベッドに飛び乗った。

「ん？コイツ、ツナの弟か？」

多分、リボーンとは会った事無いから知らないフリをすることにし

た。

「ち、違うよ！」

「オレはツナの家庭教師のリボーンだぞ」

「へー、小っさいのに大変だなー」

「オマエ、嘘だと思ってんだろ」

「とーぜん。突然言われて信じる馬鹿な奴はいない」

「これでもか？」

リボーンが懐から写真を取り出した。

「あ、これって時折現れる幻の教授だとか言われるボリーン？」

「コレはオレだぞ。偽名を使ってるんだ」

「ふぅん……ま、信じてやろーか。んでその家庭教師（かてきょー）さんはオレに何の用かな？」

オレは懐から板チョコと取り出して、包装紙を破って一欠けら齧った。

「オマエは何者だ？」

第１１色　虹輝、リボーンに会う！（後書き）

裏？設定

キョウがいる天界での魂の位は、罪人＜人間＜堕天使＜天使＜天使長＜大天使＜大天使長＜下神＜中神＜上神＜最上神＜創造神というふうに分かれています。

神の位は更にに分かれていて下級神の下、中、上、中神の下、中、上、上神の下、中、上です。

最上神と創造神は分かれてません。

大天使はミカエル、堕天使はルシファー、またはルシフェルと呼ばれています。

以上裏？設定でしたー。

では第３回、ヒナと鏡のＧＩＳコーナーの始まり、始まり。

今回のゲストは、悪童スモーキン・ボム獄寺隼人！

ヒュー、ヒュー！パチパチパチパチ……

鏡「何か拍手が聞こえたな…」

では質問へ行きましょう！

虹輝の事をどう思いますか？

獄「変な奴」

鏡「山本よりも簡潔な答えだな…」

千春の事をどう思いますか？

獄「十代目にベタベタくっ付きやがって……！目障りだ…！」

鏡「オレに言った事も嘘だって位に守られてるよな…」

これで今回のＧＩＳコーナーは終わりです。

次は世界最強のヒットマン、リボーンがゲストです！

ではさようなら。

第１２色　いろんな意味で虹輝の危機！

Ｓｉｄｅ　キョウ

「それでは、今から緊急天界会議を始める！」

上級神であり、この会議の議長である香良洲（カラス）様が声を上げた。

あぁ……もう、最悪なことになった…

チッ…あのアホ部下が上級神に伝えちまったせいで虹輝の身が危うくなったなんて信じたくないぜ…。

虹輝この会議で消すか、様子を見るかが決まる。

もし消すとなったら…オレは虹輝を死んだって守ってやらねェと…。

Ｓｉｄｅ　虹輝

「オマエは何者だ？」

「…は？」

思わずオレは聞き返した。

何者って…聖華薔薇学園の創立者の孫で転生者兼…傍観者？

でもそんな事いえねーしな…。

「早く答えろ。じゃねェと…」

リボーンはオレのこめかみに拳銃を当てた。

チッ…どうすれば…。

――――――虹輝、聞こえるか！？――――――

キョウ！？どこにいるんだ！？

オレは辺りを見回したが、ツナとリボーン以外には居ない。

――――――オレ等神だけが使える神術を使ってるからオレはそこに居ない――――――

へー、そうなのか。ところでどうしたんだ？

――――――オマエの身が危ういことになって来てる――――――

ど、どういう事だよ！

――――――他の神たちがオマエを危険だと思って消そうとしてるんだ――――――

へ！？オマエ以外にも神っていたんだー。

――――――さっき「オレ等」って言っただろーが。それよりも武器の使い方教えてやる――――――

え？オレ、使えてるけど？

――――あの光を手に集めんのって時間かかるだろ？だから早い発動をするための条件教えてやる――――

マ、マジか！？

――――あぁ。発動する前に「断罪者（ジャッジメント）」って言え。それですぐ発動できる――――

何で「断罪者（ジャッジメント）」なんだ？

――――あの黒い鎌の名前なんだとよー。オレの爺さんが言ってた。あ、ヤベッ！じゃーな――――

あ、オイ！待てよ！

それっきりでキョウは返事をしてこなかった。

だけど、これなら今の状況を打開できるかも！

「早く答えやがれ」

チャキ、と音がする。

その直後、オレは手を後ろに回して。

「断罪者(ジャッジメント)！」

と叫んで黒い鎌を具現化させていた。

「何っ！？」

リボーンは身を翻して、銃を何発か撃ってたけど全く当たらなかった。

オレは保健室の窓から逃げて、瞬間移動(テレポート)して家に帰った。

何故か、恭弥が家を訪ねてきてオレを応接室へ連行していったのはまた別の話。

っつーか、何でオレが家にいるって分かったんだ？

第１３色　天界の決断（前書き）

前話で「ヒナと鏡のＧＩＳコーナー」が出来なくてすみませんでした！
勉強に見せかけてパソコンやってたのが母親にバレかけたんです！
ホントすみませんでした！

話題は変わりますが今回は天界Ｓｉｄｅだけです。
さて、虹輝の運命は如何なるでしょうか！
それでは第１３色をお楽しみください！

第１３色　天界の決断

Ｓｉｄｅ　キョウ

「今までの様に消してしまえば良いではないか！」

「だがその小娘は、自分の力に気づいていないやもしれぬぞ？」

「いや、あの狡賢い奴等の子供だ。きっと奴等は自分の子供に力の事を教えたに違いない！」

「でものう。教えていたとしても今は何も儂等に害為す事はしておらんぞよ？」

「確かにそうですね。殺さず様子を見れば良いのでは有りませんか？」

上級神の阿呆爺達が口論を始めている。

相も変わらずウザい爺達だなー。

でも今最後に発言した香良洲様は御美しいと思うけどな！男だけど。

「キョウ、お主も何か言わぬか！最年少で上級神になったお主の意見も聞かせよ！」

「へ？」

ヤッベェ、話聞いてなかった。

「お主はあの小娘を消す事に賛成なのじゃろう？」

アレ？い　つ　オ　レ　が　そ　ん　な　事　言　っ　た？

勝手に勘違いすんな、アホ爺。

年取りすぎて脳も腐り始めて来たか？

「オレは様子（よーす）を見ればいいと思いますよー」

「何故じゃ？」

「だって虹輝は自分の出生について全く知らないんすよー？
例え知ったとしても、３年前のあの事件の真相を教えない限り大（だい）じょー

丈夫(ぶ)でしょ」

「3年前のあの事件……？アレが何故関係あるのだ？」

「実はー…死んだのは虹輝の血縁者のほぼ全員。
虹輝の爺さんと虹輝だけが生き残ったんすよねー」

「それは真(まこと)か！？」

「ホントですよ。我が真名に誓います」

真名に誓わすな！この糞爺！

「……ムゥ…では判決を下そうぞ」

「そうですね」

香良洲様がニッコリと微笑む。

「では…生かす方に12票で、消す方に3票。よって織羽虹輝は様子見とします！」

香良洲様が高らかに言い終える。

何故か、上級神に報告した態度の悪いオレの部下はガッツポーズをしていた。

第１３色　天界の決断（後書き）

キョウがいつもと違うのはかなり真剣だからです。
でもちょっとはふざけてるので言葉の最後を伸ばしたりしてます。
さて、それでは今回の「ヒナと鏡のＧＩＳコーナー」を始めていきましょう！
今回のゲストは世界最強のヒットマンであり、ボンゴレファミリー１０代目の家庭教師であるリボーンさんです！
ヒューヒュー、パチパチパチ……
リ「ヨロシクな」
では質問です。虹輝の事をどう思いますか？
リ「謎が多すぎるヤツだ。戸籍を調べても分かる事は少ねェしな」
鏡「ギクッ」
リ「ところでこの白髪野郎は誰なんだ？」
では千春の事はどう思いますか？
リ「無視するな。まぁ、平凡な奴だな」
鏡「そりゃ、オレが準備万端でトリッ…むぐむご…」←作者に口を塞がれる

では次回のゲストは誰様僕様雲雀様、最強風紀委員長雲雀恭弥さんです！

それではさようなら！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4038s/

家庭教師ヒットマンREBORN!　　とある異端な傍観者

2011年11月20日05時39分発行